

第50回 高知女子大学看護学会



日 時 : 令和6年7月20日(土) 10:00~16:00

場 所 : 高知県立大学 池キャンパス、オンライン

主催 : 高知女子大学看護学会

共催 : 高知県立大学

協賛 : 高知県立大学看護学部同窓会

後援 : NHK 高知放送局、高知新聞社、RKC 高知放送、KUTV テレビ高知、
KSS さんさんテレビ、エフエム高知

学会長 あいさつ

高知女子大学看護学会は今年、50回目という節目を迎えます。本学会は、わが国の看護界で最初に誕生した学会として、新たな看護の「知」を創造し、看護学の進歩発展に寄与するとともに、看護職者の相互研鑽やネットワークづくりの場の提供などに尽力してまいりました。こうした半世紀にわたる歩みを支えてくださった学会員の皆様、地域の看護職の皆様に、心より感謝申し上げます。

さて、第50回高知女子大学看護学会は、メインテーマを「新たな看護実践知を『共』に『創』ろう」としました。看護は実践の科学であると言われるように、看護専門職者は日常の看護実践からエビデンスを抽出し、蓄積し、看護実践知として発展させてきました。近年、医療の高度化・細分化、少子高齢化、グローバル化などを背景に、健康課題は複雑性を増し、人々の健康ニーズは多様化しています。さらに、感染症の世界的パンデミックや災害、紛争の発生、経済格差の拡大など社会状況は不安定性・不確実性を増しており、私たち看護専門職者にはこれまで以上に多様な健康課題にチャレンジすることが求められています。その過程においては、看護専門職者同士が力を合わせるだけでなく、多様な立場の関係者とも対話しながら、看護の既存の枠組みを越え、新たなケアを「共」に「創」り上げていくことが重要です。ケアの対象者、他の専門職者、地域の人々など、バックグラウンドや価値観、考え方が異なる人たちとも対話を重ね、対等に意見を出し合い、それぞれが持つ強みを引き出し結びつけながら、創発的な相乗効果を生み出していくことこそが、複雑な課題の解決や新たな看護の創造につながります。変革の時代にあって、新たな看護実践知の創造をいかにして関係する人々と共に推進していくか、この学会を通して皆様と共に考えてみたいと思います。

今回はメインテーマの下、近畿大学医学部・病院運営本部 看護学部設置準備室 教授の小松浩子先生を講師にお迎えし、「共に創る健康生成：看護の視座から発展を考える」というテーマでご講演いただくことになりました。小松先生はこれまで、当事者やコミュニティなど様々な対象・場での「共創」に取り組んでこられた多彩な経験をお持ちです。「共創」の基本的な考え方を学ぶとともに、有機的な共創のあり方を考える機会になることでしょう。

また、午後からは、4名のスピーカーによるリレートークと、5つのワークショップを開催します。ワークショップでは、コミュニティでの子どもホスピスの創造、患者をチームで支えるためのシステム構築、当事者・家族の知恵を集めて障害と向き合う、臨床と教育機関で取り組む看護学実習、卒業後に挑んでいる看護実践など、様々な場やレベルでの「共創」とそれに基づく看護実践知の創出を取り上げます。身近なところからできる「共創」を考え、挑戦してみる、そのきっかけづくりになればと考えています。

高知女子大学看護学会は、今後も更なる発展を目指して努力を重ねてまいります。会員の皆様、地域の看護職の皆様には、引き続き温かく見守っていただきますよう、お願い申し上げます。

令和6年7月
高知女子大学看護学会
学会長 野嶋 佐由美

学会 プログラム

7 月 20 日(土)

10 : 00 ～ 開会の辞

学会長あいさつ

高知県立大学看護学部同窓会 会長あいさつ

高知県立大学看護学部 学部長あいさつ

10 : 15 ～ 講演

於 共用棟 2F 大講義室

共に創る健康生成：看護の視座から発展を考える

講師：小松 浩子

(近畿大学医学部・病院運営本部

看護学部設置準備室 教授)

座長：藤田 佐和

(高知県立大学看護学部 教授)

12 : 00 ～ 学会総会

13 : 30 ～ リレートーク

スピーカー：野嶋 佐由美 (高知県立大学看護学研究科 特任教授)

藤田 佐和 (高知県立大学看護学部 教授)

小澤 若菜 (高知県立大学看護学部 准教授)

岩崎 順子 (高知県立大学看護学部 講師)

司 会 : 中野 綾美 (高知県立大学看護学研究科 特任教授)

14 : 45 ～ ワークショップ

■ ワークショップ 1 於 看護学部棟 2F C220

病気や障がいのある子どもと家族を支える子どもホスピスの創造

話題提供者：濱田 裕子（下関市立大学 看護学部設立準備室／
NPO 法人福岡子どもホスピスプロジェクト代表理事）

コーディネーター：笹山 睦美（高知医療センター 小児看護専門看護師）

■ ワークショップ 2 於 看護学部棟 3F C310

身体的な健康問題を抱える患者をチームで支えるためのシステム構築

話題提供者：井上 智恵（京都済生会病院 慢性疾患看護専門看護師）

コーディネーター：有田 直子（高知県立大学看護学部 准教授）

■ ワークショップ 3 於 看護学部棟 3F C313

当事者・家族の知恵を集めて高次脳機能障害と向き合う

話題提供者：瓜生 浩子（高知県立大学看護学部 教授）

コーディネーター：中平 洋子（聖カタリナ大学看護学部 教授）

■ ワークショップ 4 於 看護学部棟 3F C309

臨床と教育機関で取り組む新たな看護学実習

話題提供者：内田 雅子（高知県立大学看護学部 教授）

窪田 美穂（高知医療センター 慢性心不全看護認定看護師）

加藤 昭尚（高知県立大学看護学部 助教）

コーディネーター：原田 千枝（高知大学医学部附属病院 看護部長・副院長）

■ ワークショップ 5 於 看護学部棟 3F C314

卒業後に私が挑んでいる看護実践

話題提供者：高村 智絵（高知中央訪問看護ステーション 訪問看護師）

猪野 郁美（高知赤十字病院 助産師）

今西 清か（新居浜市立川東中学校 養護教諭）

コーディネーター：久保田 聡美（高知県立大学看護学部 教授

/健康長寿研究センター センター長）

講演 要旨

共に創る健康生成：看護の視座から発展を考える

講師：小松 浩子

近畿大学医学部・病院運営本部 看護学部設置準備室 教授

「共創」は関係のあり方であり、社会の作り方を意味する言葉である¹⁾。「共創」という用語は、近年様々な分野で目にする。関係の主体、関係の目的、関係の仕方などにより、〈価値共創〉〈共創社会〉〈未来医療を共創する〉など多様な用いられ方をしている。この概念は、ミシガン大学ビジネススクールの教授であった C.K. プラハラードとペンカト・ラマスワミの共著『価値共創の未来へ—顧客と企業の Co-Creation』(2004 年)²⁾によって提唱され、広く知られるようになった。この書で「共創」については、地球規模の環境変化、資源の枯渇を見据え、「企業が様々なステークホルダーと協働することで、共に新たな価値を創造すること」と定義されている。保健医療分野では、2010 年頃より「共創」をキーワードにした研究、教育、実践に関する文献が急増している。その背景には、国や地域における健康・医療の格差、世界規模の健康・医療資源の不足、貧困・環境劣化・紛争・大規模感染症などによる健康危機が存在する。いくつかの文献を通底する「共創」の考え方には、持続可能な健康社会をめざし、当事者や地域の人々が包括的、包摂的につながり、協働することを通して、健康や幸福 (well-being) を高めることが含まれる。保健医療分野において「共創」の重要性が施策や方針に盛り込まれるようになったのは、米国の Institute of Medicine による patient-centered な医療の推進に関する声明(2001 年)³⁾、WHO による低・中所得国における people-centered care に関する報告(2010)⁴⁾が契機と考える。私は、これまで、patient-centered care や people-centered care に関心をもち、その考え方に基づく実践・研究・教育をすすめてきた。これらの取り組みの中で、「共創」をめざした新たなケア開発や実装、その検証に基づくケアモデルの構築、教育への導入などを試みてきた。「共創」の考え方や理念は、誰しもがその重要性を認めるが、日々の実践として展開し、組織化しシステムとして持続・発展させることが極めて難しい。それでもなお、危機の時代の健康生成に大きな期待を寄せられている看護職は、あらゆる人々の健康と幸福をめざして当事者や地域の人々との相互理解と協働による「共創」に基づく保健医療を推進していかなければならない。講演では、私のこれまでの試み、失敗を含めてお話し、未来の保健医療の発展の手がかりを皆様とともに検討したい。

- 1) 中西淑美. “共創未来” ―協働意思決定において. 日農医誌, 69(6); 580-584. 2021
- 2) C.K. プラハード, ベンカト ラマスワミ著, 有賀裕子訳. 価値共創の未来へ―顧客と企業の Co-Creation. Harvard business school press, 2004
- 3) Institute of Medicine (US) Committee on Quality of Health Care in America. Crossing the Quality Chasm: A New Health System for the 21st Century. National Academies Press (US); 2001
- 4) World health report 2010. People-centered care in low- and middle-income countries. Geneva, World Health Organization, 2010.
<https://www.personcenteredmedicine.org/doc/genevathree/geneva2011i.pdf>
(検索日 2024/06/07)

【講師略歴】

聖路加看護大学（現 聖路加国際大学）教授、慶應義塾大学看護医療学部教授ならびに学部長を歴任し、2020年4月から2024年3月まで日本赤十字九州国際看護大学学長。聖路加国際大学名誉教授、慶應義塾大学名誉教授。

学位：博士（看護学）

専門分野：がん看護学・緩和ケア

ワークショップ 1

病気や障がいのある子どもと家族を支える子どもホスピスの創造

話題提供者：濱田 裕子（下関市立大学 看護学部設立準備室／NPO 法人
福岡子どもホスピスプロジェクト代表理事）

コーディネーター：笹山 睦美（高知医療センター 小児看護専門看護師）

このワークショップでは、病気や障がいのある子どもと家族を支えるために「子どもホスピス」の開設を目指し、医療・看護だけではなく、異業種の方と新たなケアを「共」に「創」る取り組みを継続されている濱田裕子先生を話題提供者にお迎えし、コミュニティの中での様々な立場にある方々との共創による看護の実践知の発展についてみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

「子どもホスピス」とは、重い病気や障がいをもつ子どもと家族の生活をトータルに支える場所として 1982 年に英国で誕生しました。その後、欧米に広く普及し、日本では 2012 年に大阪、2016 年に東京にオープンしています。濱田先生は、2014 年に NPO 法人福岡子どもホスピスプロジェクトを立ち上げ、子どもと家族を対象にしたイベントや交流会、勉強会や講演等の教育啓発活動を行うなど、日々、奮闘されています。今回は、医療や福祉だけでなく、教育や保育、音楽、芸術など子どもに必要なあらゆる領域をつなげ、子どもとその家族が主役になれる「子どもホスピス」を創るために続けてこられた活動について話題提供してください。

病気や障がいをもつ子どもには多様な視点やカタチの支援が必要であり、「子どもホスピス」の活動においては、看護という枠を取り払って様々な人と繋がることが求められます。そうすることで支援が豊かになるだけでなく、医療や看護の中だけでは見えないことに沢山気づくそうです。しかしその一方で、社会の中で「子どもホスピス」の意義や活動を理解してもらう難しさもあります。また、その活動を持続可能な形にしていくことも大きな課題です。

従来の看護の枠にとらわれず、視野を広げ、医療者と地域が共に創り出すケアについて、その意義やそのために必要なこと、そして難しさなどを共に考え、学びを深める場となればと思います。

ワークショップ 2

身体的な健康問題を抱える患者をチームで支えるためのシステム構築

話題提供者：井上 智恵（京都済生会病院 慢性疾患看護専門看護師）

コーディネーター：有田 直子（高知県立大学看護学部 准教授）

慢性疾患と共に生きる人々が病状をコントロールするためには、患者自身による療養生活の管理が必要であるが、それを継続することは難しいことが多く看護師による療養生活支援が必要になる。

話題提供者はこれまで主として、慢性腎臓病（CKD）患者への療養生活支援を行っているが、当初は内発的動機づけを高めることが重要だと考え「透析にならないように気をつけましょう」と伝えていた。しかし、ある時このような危機感に基づく動機づけを行い、患者が療養生活を送るようになったとして、結果的に透析を始めることになったら患者は透析をどのように受け止めるのか、これまでの療養生活を失敗体験として捉えてしまわないかという疑問をもった。そこで、CKD患者を対象に看護研究を行った結果、CKD患者への支援では「患者が自分の腎機能が低下していくことを受け止めるための支援」が重要であることが明らかになった。これまでのCKDの医療において、看護師が外来でCKD患者に支援することはほとんどなく、主に透析開始してからの関わりであったが、この研究結果を踏まえ保存期（透析開始前）からの看護支援の必要性を痛感した。そこで、2016年にCKD看護外来を立ち上げ、これまでに500名以上の患者を支援してきた。当初は、減塩を主とした療養生活支援や腎代替療法の意思決定支援が主であったが、患者の高齢化、生活基盤が弱い患者の増加、腎代替療法においては透析の非導入を選択する患者も増加し、社会福祉士、ケアマネジャー、訪問看護師と連携を図ることが多くなっている。このような現状を踏まえ、CKD患者の支援においては院内のみならず、地域を含めた支援システムの構築が重要である。

本ワークショップでは、慢性疾患看護専門看護師の井上智恵さんに、これまでのCKD看護外来の活動を紹介していただき、患者支援システムの構築に関してフロアのみなさんとディスカッションしたいと考えている。

ワークショップ3

当事者・家族の知恵を集めて高次脳機能障害と向き合う

話題提供者：瓜生 浩子（高知県立大学看護学部 教授）

コーディネーター：中平 洋子（聖カタリナ大学看護学部 教授）

高次脳機能障害は、外傷性脳損傷や脳血管障害などに起因する記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害などにより、日常生活や社会生活への適応に困難を有する状態で、複合的に症状が現れることや外見上はわかりにくいことから、対応の難しさがあります。また、社会生活の中で顕在化しますが、社会的認知度の低さから、当事者は様々な生き辛さを抱え、家族は当事者への対応の難しさや当事者と周囲の人との関係調整の難しさを抱えるなど、ストレスフルな状況に置かれています。

この課題に取り組むために、高次脳機能障害の当事者・家族の会に参加する当事者・家族・支援者（医療者）と共に、困りごととその効果的な対応方法、生活上の工夫などを集めたパンフレット『高次脳機能障害当事者・家族の知恵袋』を作成した高知県立大学の瓜生さんを話題提供者にお迎えします。このパンフレットは、当事者・家族の実生活から出てきた経験知を集約したものであり、生活のしづらさを感じている他の当事者と家族に活用してもらうだけでなく、支援者や地域社会の方々に高次脳機能障害を知ってもらう手段としても活用されているそうです。

ワークショップでは、パンフレット作成のきっかけ、当事者・家族の声をパンフレットという形にしていくプロセス、当事者・家族・支援者が「共」に「創」ったパンフレットの内容を紹介していただきます。また、10年以上続いている当事者・家族の会を通じた交流において、大切にしている姿勢や、交流の中で生じた相乗効果、今後の展望についてもお聞かせいただきます。

瓜生さんの実践を参加者の皆様と共有し、今後、病気や障がいをもつ当事者やその家族と「共」に看護実践知を「創」っていくために何ができるのか、何が必要なのかについて、一緒に考える機会にしていきたいと思います。

ワークショップ 4

臨床と教育機関で取り組む新たな看護学実習

話 題 提 供 者：内田 雅子（高知県立大学看護学部 教授）

窪田 美穂（高知医療センター 慢性心不全看護認定看護師）

加藤 昭尚（高知県立大学看護学部 助教）

コーディネーター：原田 千枝（高知大学医学部附属病院 看護部長・副院長）

ワークショップ 4 は、看護基礎教育の最終学年の学内実習において認定看護師と教員が協働した経験を取りあげ、実践知の視点から意義と課題を探求する。

高知県立大学看護学部において、最終学年が秋期に履修する「看護実践能力開発実習」は、80 数名の学生が4 クールに分かれ、各クールで異なるケースを担当し、根拠に基づく実践を探求する学内実習である。COVID-19 感染拡大は学生の臨地実習経験に大きな影響を及ぼし、ベッドサイドの滞在時間や様々な関係者とのコミュニケーションが制限され、臨床の看護実践を観察する機会も乏しい状況であった。

そこで、最終学年の学生がケースの専門的治療や看護実践の現状、及び患者・家族の病気体験への理解を深めて看護過程を展開できるよう、各ケースの治療・ケアを専門とする認定看護師へ講義と助言を依頼することにした。他大学では教育機関と医療機関のユニフィケーションによって、学生は学習目標達成の促進や将来像の具体的イメージ化、臨床看護師においては新人看護師のレディネス把握などの効果が報告されていた。

今回のワークショップでは、本実習を担当した認定看護師と教員に、学生への学習支援をそれぞれの立場から振り返ってご報告いただく予定である。また、学生の反応等を振り返り、学生への教育効果やその他の副次的効果について考えていく。これらを通して、臨床看護師と教員が協働して看護基礎教育に取り組むことの意義や難しさについても検討してみたい。

会場の皆様との意見交換を通して、それぞれの立場で実践知を掘り起こし活用するための機会となれば幸いである。

ワークショップ5

卒業後に私が挑んでいる看護実践

話題提供者：高村 智絵（高知中央訪問看護ステーション 訪問看護師）

猪野 郁美（高知赤十字病院 助産師）

今西 清か（新居浜市立川東中学校 養護教諭）

コーディネーター：久保田 聡美（高知県立大学看護学部 教授

/健康長寿研究センター センター長）

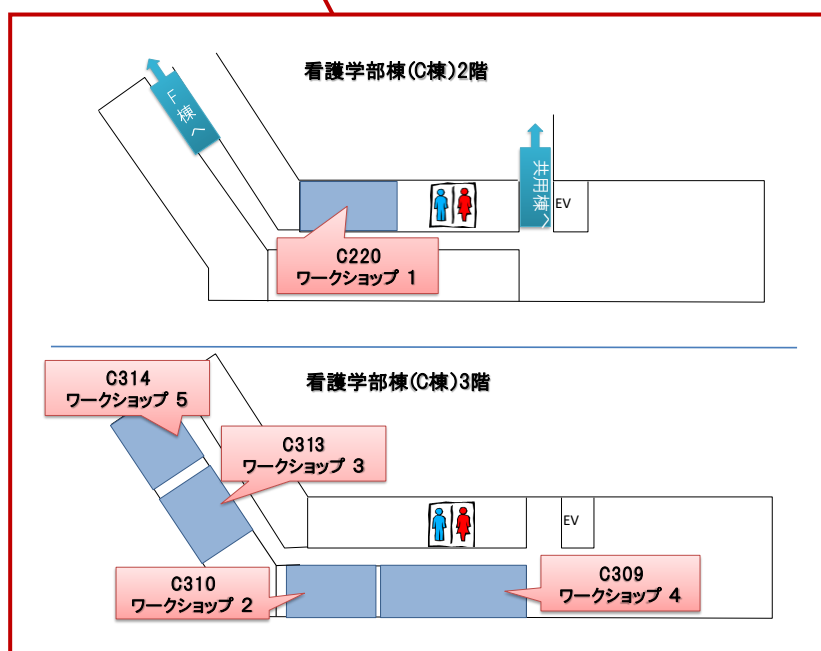
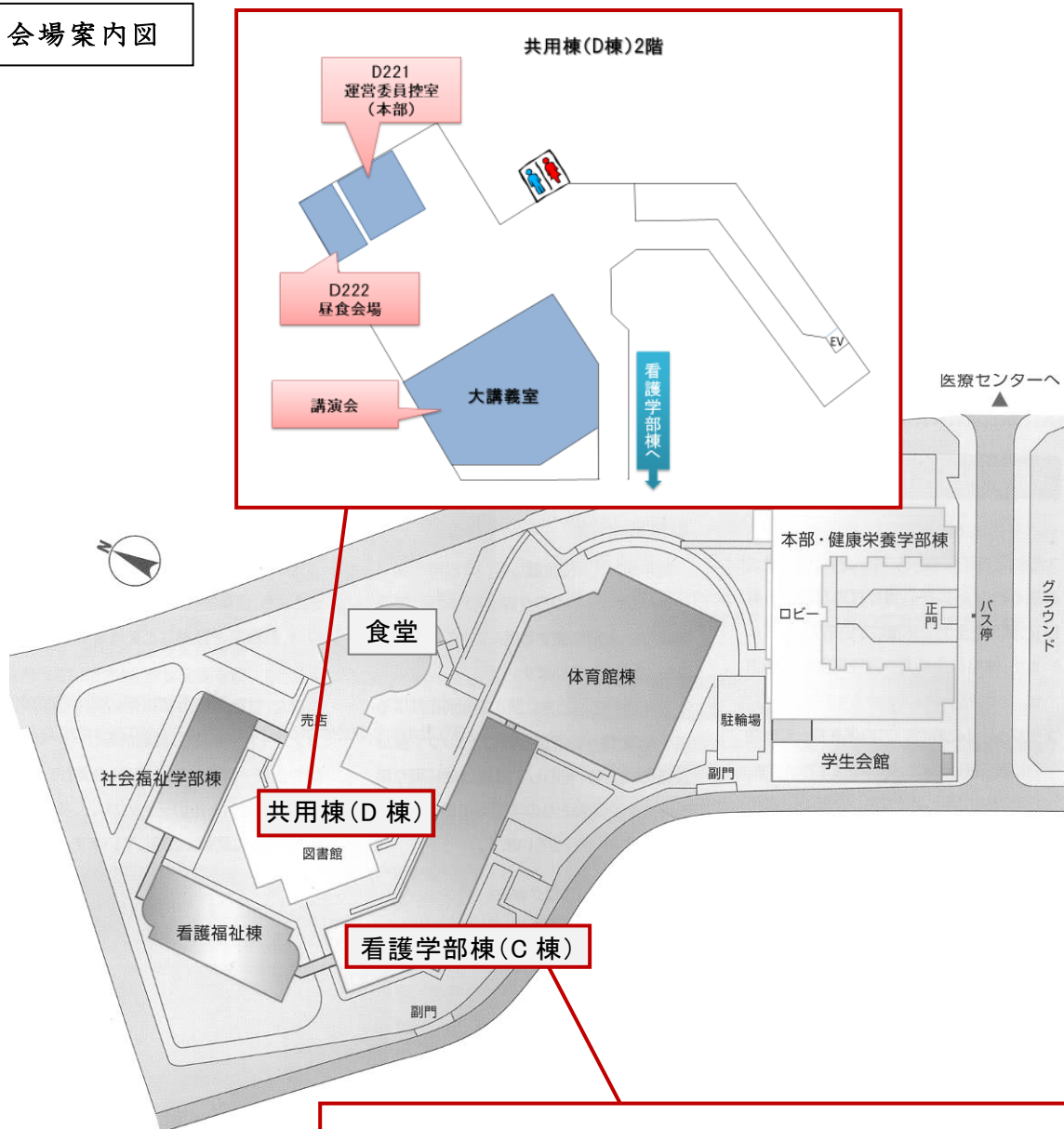
このワークショップでは、卒後4年目～8年目となる本学の卒業生3名を話題提供者に迎え、それぞれの活動の場で、専門分野の看護実践をいかにして身につけ、発展させてきたかを、ご自身の歩みを振り返りながらお話しいただきます。

高村さんは、本学卒業後すぐに訪問看護ステーションに就職し、本学で開講している高知県中山間地域等訪問看護師養成講座の「訪問看護スタートアップ研修」を受講後、訪問看護師としての第一歩を踏み出されました。その後も訪問看護師としての経験を積みながら、在宅療養者の多様な健康ニーズに対応するため、特定行為研修を受講するなどして、自らの看護実践力を高める取り組みをされています。猪野さんは、本学の助産コースで学び、卒業後は病院の助産師として活躍されています。経験を重ね、期待される役割が変化するなかで、研修を受けアドバンス助産師の認証を受けたり、学校での性教育の活動に参画したりするなど、活動の幅を広げておられます。今西さんは、コロナ禍真っ只中の時期に本学を卒業し、中学校の養護教諭として奮闘してこられました。感染症対策や啓発活動などに力を入れ、様々な取り組みを創造的に行う一方、看護師・保健師の資格をもつ養護教諭だからこそできることを模索しておられます。

このような、養護教諭4年目、訪問看護師7年目、助産師8年目というそれぞれのキャリアを振り返りながら、実践において自分が大切にしてきたことや、頑張ってきたこと、そのなかで自分が直面した困難や葛藤、楽しかったことや得られたものなどを会場の皆様と共有します。また、今後取り組んでみたいことや目指していることなどもお聞きできればと思います。既に看護職者として活躍中の皆様には、自らがいかにして看護実践力を高め、活動の幅を広げてきたかを改めて振り返る機会に、また、現在看護を学んでいる学生の皆様には、自らの看護専門職者としての将来像を思い描く機会になればと思います。

memo

会場案内図



高知女子大学看護学会



(連絡先)

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部内

FAX : 088-847-5524

E-mail : kwuaonaddress@cc.u-kochi.ac.jp

高知女子大学看護学会ホームページ <https://www.u-kochi.ac.jp/~nsgakkai/>

facebook <https://www.facebook.com/nsgakkai>